

# 魔を狩る夜の果てに

---

浴室に満ちる白い湯気の向こうで、頼子が静かに帯を解く。

ずしり、と畳に落ちた戦装束は魔性の血と瘴気にまみれ、黒ずんだ染みを幾筋も刻んでいた。今宵の獲物は手応えがあった。郊外の廃寺に巣食った土蜘蛛——人の軀を苗床に産卵する下衆な魔性。頼子の太刀が四匹、薫子の呪術が二匹。合わせて六匹の蜘蛛を塵芥に還してきたばかりだ。

「香子さま、お背中を」

浴室の小さな椅子に腰掛けた薫子の背後に膝をつき、頼子は手桶の湯をそっと肩口から注ぐ。白い肌を滑り落ちる雫が、背中の中の中心線を伝って窄まった腰のくぼみへと吸い込まれていく。戦いの昂りはまだ軀の奥で燻り続けており、指先がかすかに震えているのを頼子は自覚していた。

「……頼子姉さまこそ、お疲れでは」

振り返ろうとした薫子の肩を、頼子はそっと押し止める。

「いけませんよ。まずは貴女を清めさせてください。こんなに冷え切って……戦いの後はいつも、貴女は無理をなさる」

手拭いに石鹸を泡立てながら、頼子の声はいつもより低く、甘く、蕩けるような響きを帯びていた。それは魔性を屠った昂揚が、別のかたちに転じ始めた証だった。

「ん……っ♡」

泡立った手拭いが薫子のうなじを滑った瞬間、小さな吐息が漏れた。頼子の手は止まらない。首筋から肩甲骨のあいだ、背骨のひとつひとつをなぞるように下り、やがて脇の下から横腹へ——その先にある豊かな双丘のふくらみを、あえて避けるようにして手拭いを這わせていく。

「頼子姉さま……今日は、その……なんだか、手つきが」

「ふふっ。手つきが、何です？」

頼子の唇が薫子の耳朶に触れるか触れないかの距離で囁く。湯気に濡れた黒髪から、墨と白檀の香り——薫子の愛液のそれを薄めたような、雅な芳香が立ちのぼっていた。

「いやらしい、です……♡♡」

言い切った薫子の白い肌が、さあっと桜色に染まる。

頼子は手拭いを落とした。代わりに素手のひらで、薫子の背中をまっすぐに撫で下ろす。指の腹が感じる華奢な背骨の感触、その左右に張り出した肩甲骨の羽のような広がり。湯でしっとり濡れた肌は吸い付くような滑らかさで、指をどこまでも誘い込んでくる。

「香子さま」

耳元で名前を呼べば、薫子の肩がびくんと跳ねた。

「今夜は——いけません。私、少し……昂っております」

「……蜘蛛の、血のせいですか」

「ええ。土蜘蛛の体液には、人の情念を煽る毒が交じります。大したものではありませんが——今宵は格別に、貴女を求めてしまいそうです」

光の指が、ついに薫子の横腹を滑り上がり、両側からふくよかな双丘のふくらみを捕えた。

「あ……っ♡♡」

115cm・Mカップの質量が、頼子の手のひらの中でたっぷりと形を変える。指のあいだから零れそうなほど豊かで、それでいて張り弾力に満ちたその感触は、何度触れても頼子の理性を容易に溶かした。

「今日も、とてもお美しい。この柔らかさ……私だけのものです」

指の腹が双丘の頂——まだ触れていないのに、期待で硬く尖り始めている淡紅色の蕾を、わざと避けて円を描く。

「ひゃ……っ、頼子、姉さま……そこ、まだ……♡♡」

「まだ？ まだ、触れてはおりませんよ？ それとも——この蕾が、私の指を待ち焦がれているのですか？」

「そんな、言い方……あうっ♡♡♡」

親指と人差し指が、硬く尖った乳首をそっと摘み上げた瞬間、薫子の背中が大きく仰け反った。小ぶりで可憐なその蕾は、指のあいだで脈打ちながらさらに硬度を増し、まるで頼子の指を拒まないと主張するかのようにぷっくりと充血していく。

「可愛い……貴女の蕾は、なんて素直なのでしょう。触れる前からこんなに硬くしておいて、『まだ』だなんて。ふふっ」

「だってえ……♡♡」

片方の手で左の乳首を優しく転がしながら、頼子はもう一方の手を薫子の臍の下へと滑らせていく。60cmの細くしなやかにくびれを過ぎ、やがて指先は薄い陰毛の生え際に触れた。

「香子さま……もう、こんなに」

陰毛の奥、まだ触れてもいない秘裂からは、とうに愛液が滲み出して腿の付け根を濡らしていた。さらりとした粘度の低い蜜が、頼子の指を待っていたかのようにとろりと絡みつく。

「お恥ずかしい……戦いの後だというのに、私ったら……♡♡」

「いいえ。戦いの昂りを、こうして私と鎮め合える——これ以上の喜びがありませんか」

言いながら、頼子の中指がそっと陰毛を分け、濡れそぼつ秘裂に触れた。

「ひゃああっ♡♡♡」

ビクンツと全身を跳ねさせた薫子が、椅子からずり落ちそうになるのを、頼子は背後から抱きとめる。125cm・Pカップの頼子の豊満な胸が薫子の背中に押し付けられ、互いの尖った乳首が背中越しに触れ合う感触に、二人同時に息を呑んだ。

「あ、あの……頼子姉さま……場所を、変えませんか……？」

薫子の上ずった声に、頼子はただ肯く。

立ち上がろうとした薫子の身体を、頼子は横抱きに抱え上げた。190cmの長身と戦士としての膂力があれば、178cmの薫子など羽のように軽い。

「まあっ！ 頼子姉さま、私は自分で……！」

「いけません。悪い子は、母が運びます」

「あ、悪い子だなんて……♡♡」

抗議の声はしかし、頼子の胸に顔を埋めたままぐもって消えた。

---

浴室を出て、薄明かりの廊下を渡るあいだも、頼子の指は薫子を離さない。横抱きにされたまま、薫子の腿の内側を頼子の指が這いまわる。さきほどまで触れていた秘裂からは、いままなお蜜がとろとろと溢れ、頼子の腕を濡らしていた。

「頼子姉さま……廊下で、こんな……誰か来たら……♡♡」

「誰も来ませんよ。この奥は、私と貴女だけの世界です」

寢室の襖を背中で開け、頼子は薫子を褥の上にそっと横たえた。月明かりだけが差し込む薄闇のなか、濡れた黒髪を敷布に広げて横たわる薫子の姿は、それだけで一幅の絵巻物のようだった。

「美しい……」

思わず零れた頼子の呟きに、薫子が腕を伸ばす。

「頼子姉さまも……こちらへ。私だけ、こんなに乱れて……ずるいです」

薫子の手が頼子の首に回され、引き寄せられるままに褥へ倒れ込む。向かい合って横たわれれば、互いの豊かな双丘がむにゆりと押し潰し合い、硬く尖った四つの蕾が互いを探り合うように擦れ合った。

「んうっ♡」

「あ……っ♡♡」

同時に漏れた声が、闇に溶ける。

唇を重ねたのはどちらからだったか。互いの舌が絡み合い、唾液が混ざり合う。ちゅ、くちゅ、と濡れた音が寢室に満ちていく。頼子が薫子の下唇を甘く噛めば、薫子は頼子の舌を吸い上げて応える。

「ふあ……頼子姉さまの口づけ、好き……蕩けてしまいそう……♡♡♡」

「私もです、香子さま。貴女の唇は、甘露よりも甘い」

口づけを交わしながら、頼子の手が再び薫子の双丘を捕える。今度は遠慮なく、両の手のひらでたっぷりと揉みしだき、指のあいだで形を変える豊満な感触を味わい尽くすように。

「あっ♡ んんっ♡♡ そこ、優しく……あ、でも……もっと……♡♡♡」

「もっと、ですか？ では——こうです」

頼子は身をずらし、薫子の左の蕾に唇を寄せた。ちろりと舌先で頂を舐め上げれば、薫子の背中が弓なりに反り返る。

「ひゃああっ♡♡♡ だめ、左は……左だけは……！」

「左が、貴女の弱点でしたね。ふふっ——じゅるっ」

「あ"あ"っ♥♥♥♥」

遠慮なく吸い上げられ、舌の腹全体で蕾をぬるぬると転がされ、薫子の口からはもう言葉にならない声が溢れ続ける。両脚は無意識に頼子の腿に絡みつき、腰が小刻みに震え始めていた。

「もう……もう、いきそう……頼子姉さま、や、やめないで……このまま……♥♥♥♥」

しかし頼子は、ぎりぎりのところで口を離した。

「……え……？」

「まだ、いけません」

ぼんやりと潤んだ瞳で見上げる薫子に、頼子はゆっくりと微笑む。その笑みには、母としての慈愛と、狂気的な独占欲と、そして雌としての飢えが、どろりと混ざり合っていた。

「せっかくの綴り夜——とは満月ではありませんが、今宵は特別です。私も……もう、抑えられそうにありませんから」

そう言って頼子は身を起こし、褥の上で四つん這いになった薫子の背後に回る。

「今夜は——私が、貴女を食ります」

「……っ♥♥♥♥」

頼子の両手が薫子の108cmの豊かな臀を包み込む。戦いの中で汗と湯に濡れた肌は、月明かりを受けて白く輝いていた。指で臀裂をそっと広げられ、つぶりと冷たい空気が秘所に触れた瞬間、薫子の身体がビクンと跳ねる。

「ああ……こんなに蕩けて……♥♥♥♥」

頼子の目に映る薫子の秘所。薄く繊細な陰毛を分けて現れた淡い桜色の裂け目は、とろとろと溢れる蜜にまみれて濡れ光り、可憐な花びら——小陰唇——がひくひくと痙攣するように蠢いている。その中心で、小粒の真珠のようなクリトリスが包皮から顔を覗かせ、頼子の視線を受けてさらにぷくりと膨らんだ。

「香子さま。貴女のここは、どうしてこんなに愛らしいのでしょうか」

「み、見ないで……頼子姉さま、あんまり、じっと……♥♥♥♥」

「いいえ、見ます。すべて。貴女のすべては、私のものですから」

言うが早いか、頼子は薫子の秘裂に顔を埋めた。

「ひっ——♥♥♥！」

ぬるりと熱い舌が、陰唇をなぞり上げる。溢れる蜜を一滴残さず舐めとるように、じゅる、じゅると音を立てながら、頼子の舌は華奢な襷の一枚一枚を丹念に味わっていく。

「あっ♥ ああっ♥♥ そこ、そこ、クリ……あああっ♥♥♥！」

舌先でクリトリスをくるりと転がされた瞬間、薫子の両脚ががくがくと震え、指が布団をぎゅっと握り締める。頼子はその反応を愉しむように、今度は舌でクリトリスを包み込み、唇でそっと吸い上げた。

「あ"——っ♥♥♥」

ちゅぷっ、ちゅぱっ、じゅるるる——。

無遠慮な水音が寝室に響き渡る。頼子の舌は薫子のクリトリスを攻めながら、合間合間に膣口へと差し込まれ、名器「蛸壺」の入り口をぐちゅぐちゅと掻き回す。

「頼子姉さま……頼子姉さまあ……♥♥♥ もう、もう……！」

「——まだです」

ぱたりと舌が離れる。限界まで昂ぶった薫子の身体が、絶頂を目前に遮られてビクンビクンと跳ねる。

「うう……♥♥ ひどい……頼子姉さまの、いじわる……♥♥♥」

「ふふっ。——ですが、もう焦らしません」

頼子は身を起こし、薫子の背後にぴったりと身体を密着させた。頼子の豊かな双丘が薫子の背中に押し潰され、硬く尖った頼子の乳首が薫子の背骨をなぞる感触に、薫子がひゃんと鳴く。

そして——頼子の右手が、薫子の秘所へと伸びた。

「——っ♥♥♥」

中指が、ずぶり——と音を立てて薫子の膣内へと沈み込む。

「あ"あ"あ"あああっ♥♥♥!!」

蛸壺の名に違わず、挿入された頼子の指は即座に吸い付かれ、無数の襞がきゅうきゅうと締め付けながら奥へ奥へと引き込んでいく。第二関節まで——さらに根元まで——頼子の長い中指が薫子の最深部へ到達した瞬間、薫子は大きく弓なりに仰け反り、短い絶頂を迎えた。

「い、いっ……♡♡♡」

「まだですよ、香子さま。私の指は一本ではありません」

ずぶり——今度は薬指も同時に挿入される。

「あっ♡♡♡ に、にほん……！ にほんだめ……おく、おくまで来てる……♡♡♡」

膣内を拡張される感覚に、薫子の瞳から涙が零れる。それでも頼子の指は止まらず、二本の指を揃えてゆっくりと抽送を始めた。ぐちゅっ、ぐぼっ、じゅぷじゅぷ——溢れる愛液が指を伝い、頼子の手のひらを濡らし、褥にまで染みを作っていく。

「ああ……香子さま、貴女の中は、なんて心地よいのでしょうか。私の指をこんなに嬉しそうに締め付けて……まるで、もっと奥まで欲しいとねだっているようだ」

「ちが……ちがいますう……♡♡♡」

「変わらないでしょう？ だって——ほら」

ぐぼっ！とわざと大きく指を引き抜き、また一気に奥まで突き入れる。その度に薫子の腰が跳ね、口からはあられもない嬌声が溢れ出る。

「あっ♡ ひっ♡♡ だめ、だめそこ、奥の……奥のいいところ、ぐりぐりしないでえ……♡♡♡」

膣奥のざらついた一点——子宮口のすぐ手前——を、頼子の指が執拗に擦り上げる。名器「蛸壺」はこの一点を刺激されると、無数の襞が一斉に蠕動を始め、指を絞り上げながら絶頂へと誘うのだ。薫子自身も知らなかったこの快樂の鬨を暴いたのは、他ならぬ頼子だった。

「いやあ……♡♡♡ また、またいく……頼子姉さま、いく、いっちゃう……！」

「ええ——おいでなさい、香子さま。私の指で、存分に」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ——！

指の抽送が加速し、同時に頼子の親指がクリトリスをぎゅっと押し潰す。

「——っ♡♡♡!!!」

薫子の全身が大きく跳ね上がり、膣内が頼子の指を千切れんばかりに締め付けた。どぷつと勢いよく潮が吹き出し、頼子の手のひらから褥までをぐっしょりと濡らす。長い——あまりに長い絶頂のあいだ、薫子は何度も何度も小さく痙攣し、その度に甘い嬌声を上げ続けた。

「はあ……はあ……♡♡♡」

荒い息をついて褥に崩れ落ちた薫子を、頼子はそっと抱き寄せる。

「……気持ちよかったですか？」

「……はい……♡♡♡ もう……しばらく動けそうに……ありません……」

うっとりとした顔で頼子を見上げる薫子。絶頂の余韻に潤んだ瞳は、それでも——まだどこか物足りなさを宿していた。

「頼子姉さま……まだ、昂っておられるのですね」

薫子の視線が、頼子の腿の間に向けられる。190cmの長身に見合ったすべてが、張り詰めた質量を主張していた。頼子の秘所からも、先ほどからとめどなく蜜が滴り、褥に濃い染みを広げている。

「……ええ。蜘蛛の毒は、存外しぶといようです」

「では——今度は、私が」

薫子は上体を起こし、今度は頼子を褥に横たえさせた。

「頼子姉さま。私、先ほど言いましたよね。——私だけ乱れて、ずるい、と」

「……香子さま？」

「私も——貴女を、食りたい」

そう言って薫子が最初に口づけたのは、頼子の豊満な胸の谷間だった。

「あ……っ♡」

125cm・Pカップの圧倒的な質量。薫子は両手でその双丘を持ち上げるようにして、深い谷間に顔を埋めた。すん、と息を吸えば、頼子の甘やかな麝香のような体香が薫子の鼻腔を満たす。

「頼子姉さま……貴女のお胸は、どうしてこうも私を狂わせるのでしょうか。柔らかくて、温かくて、まるで母のようで——でも、こんなにいやらしい♡」

「ああ……香子さま、そんなに吸い付かれては……♡♡」

薫子の唇が、頼子の左の乳首を捕えた。ふっくらと丸みを帯びた淡い桜色の蕾——薫子のそれよりひと回り大きな直径1.7cmの乳首を、薫子は舌全体で包み込み、じゅるじゅると音を立てて吸い上げる。

「んうっ♡♡ 香子さま、そこ……お乳が、でてしまいそう……♡♡」

「出してください。頼子姉さまのすべてを……私にください♡♡♡」

その言葉に応えるように、頼子の乳首から甘く白濁した雫が——普段は決して滲まないはずのそれが——ぷくりと浮かび上がった。

「……あ……♡♡♡」

「——いただきます」

ちゅうう、と薫子がそれを吸い上げる。かすかに甘いそれが喉を過ぎる感覚に、薫子の目から涙がこぼれた。

「おいしい……頼子姉さま……これが、母の味……♡♡♡」

「香子さま……ああ、香子さま……♡♡♡」

薫子の口づけは、頼子の胸から臍を通り、下腹部へ——そして、逆三角形に整えられた薄い陰毛の奥、とろりと蜜を溢れさせる秘裂へと到達した。

「頼子姉さまのここ……こんなに熱くて、こんなに甘い匂いがして……♡♡」

薫子は両手で頼子の太腿をそっと開かせた。ふっくらと厚い大陰唇はすでにほぐれ、その奥で小陰唇がひくつきながら蜜を滴らせている。小豆大のクリトリスは硬く尖り、包皮から完全に露出していた。

「頼子姉さま……いただきます」

「——っ♡♡♡」

薫子の舌が頼子のクリトリスに触れた瞬間、頼子の身体が大きく跳ねた。薫子の舌使いは頼子に勝るとも劣らず丹念で、それでいて文学的な好奇心に満ちている。頼子のすべての反応を「取材」するように——どの角度で、どの強さで、どのリズムで舌を這わせれば最も悦ぶのかを、丹念に探りながら。

「ここ……ですか？ それとも、ここ……？」

「あっ♥ それ、そこ……ああっ♥♥」

クリトリスの根元を舌先でぐりぐりと押し潰され、頼子の腰が浮いた。その隙を逃さず、薫子の指がずっと頼子の膣内へと滑り込む。

「——あああああっ♥♥♥！」

名器「千曳の岩屋」——幾重にも折り重なる高密度のヒダが、薫子の細く白い指を一瞬で根元まで飲み込んだ。そのまま褻がうねうねと蠕動し、指をぎゅうぎゅうと絞り上げる。

「すごい……頼子姉さまの中、私の指を千切ってしまいそう……♥♥」

「や……恥ずかしいことを言わないで……♥♥」

「だって——こんなに、私の指を欲しがっています。ほら」

ぐちゅっ、ぐぽっ——薫子の指がゆっくりと抽送を始めると、「千曳の岩屋」はさらに激しくうねり、指を離すまいと締め付けを強める。

同時に薫子の舌が、頼子のクリトリスを激しく攻め立てる。舌先で転がし、唇で吸い上げ、時折歯を立てて甘噛みする。

「あ"っ♥ だめっ♥♥ それ、それだめえ……いく、いってしまう……♥♥♥」

「いってください、頼子姉さま。私の指で——私の口で——」

「——っ"♥♥♥!!!」

頼子の膣内が大きく痙攣し、薫子の指をぎゅうっと締め上げた瞬間、どくどくと熱い潮が溢れ出した。その量は薫子の比ではなく、褥に大きな染みを作り、月明かりの下でてらてらと濡れ光る。

「はあ……はあ……♥♥♥」

絶頂からゆっくりと戻ってきた頼子の目に映ったのは、自分の蜜で顔中を濡らしながら優しく微笑む薫子の姿だった。

「香子さま……その、汚れてしまって……」

「いいえ。頼子姉さまのものなら、何も汚くありません。むしろ——もっと、欲しいくらい」

そう言って薫子は、頼子の胸に顔を埋め、二人はそっと抱き合った。

---

「……蜘蛛の毒は、もう大丈夫ですか」

しばらくして、薫子がぼつりと尋ねる。

「ええ。貴女が鎮めてくれましたから」

「それは良かったです」

そこで言葉を切った薫子の指が、そっと頼子の背中をなぞる。

「——ですが。正直なところ、私のほうがまだ、昂っております♥♥」

「……まあ」

「戦いの昂りは、頼子姉さまだけのものではありません。私だって——土蜘蛛を呪殺したときの、あの命が消える瞬間の手応え。詞で魔を祓う昂揚。それを知っているから、私は戦えるのです」

褥の上で薫子が身を起こし、頼子を見下ろす。月明かりに照らされたその肢体は、先ほどまでの「あわわ」と取り乱す妹のそれではなく、受肉したキャスター——人理に刻まれた英霊の姿だった。

「頼子姉さま。今宵は——」

薫子の手が頼子の頬に触れ、ゆっくりと口づける。

「わたくしが、貴女を食ります。最後の一滴まで——綴り尽くすように」

「……香子さま」

「——いえ。今夜は、式部と呼ばせてください。私は今、詞ではなくこの身で、貴女への想いを綴りたい」

そう言って薫子——紫式部は、ゆっくりと褥に沈んでいった。

星が傾き、月が沈み、夜明けが近づくまで——古書店「恋綴」の奥の間からは、ふたりの甘く濡れた声が絶えることはなかった。

---

——翌朝。

開店前の帳場で、頼子がそっと薫子の肩を抱く。

「香子さま、首筋に痕が……」

「頼子姉さまこそ、鎖骨のあたりに♥」

顔を見合わせて、同時にふふっと笑みがこぼれる。

「今日はお互い、襟の詰まった着物に致しましょう」

「そうですね……。あ、でも——」

薫子がいたずらっぽく微笑む。

「襟を詰めても、匂いは隠せませんよ？ この部屋中——いいえ、店先まで、雌の匂いが満ちておりますから♥♥」

「まあまあ。それはもう、致し方ありませんね。ふふっ♥♥♥」

今日も古書店「恋綴」の一日が始まる。

帳場の奥には、むせかえるような雌の匂いが、静かに、けれど確かに、満ちていた。

——終——